













養液栽培によるキュウリの周年多収栽培

本県では、キュウリの養液栽培、周年で取り組みの実績はなく、全国でも少ない状況である。そこで、養液栽培と環境制御によるキュウリの周年多収栽培技術の開発に取り組んできました。

1 作型と品種

2月下旬、9月上旬に定植する2作型体系とします。品種は、2月植、9月植ともに‘超・彩軌’が適します。

作型	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	収量
R3年実績													10a 35t

2 栽培施設

真夏にも栽培するため、遮光のほかに気化冷却装置が必要です。栽培ハウスには、パット&ファンまたは、細霧冷房装置(セミドライミストタイプ)を装備します。



3 栽植方法と整枝・誘引方法

整枝は1株1本仕立て、つる下ろし整枝とします。2月植と9月植で下記の表のとおり定植し、2条に振り分けます。1株1本仕立てとすることで、一般的な子づる4本仕立てと比べて初期から多収となります。

定植時期	株間	枝間	栽植密度
2月	10.5cm	21cm	3,900株/10a
9月	12.5cm	25cm	3,200株/10a

4 施肥

施肥は、ECを調整して行います。定植後1.0からスタートし、収穫開始まで徐々にECを上げます。その後は、EC2.2程度の一定管理です。pHは栽培期間を通じ5.5~6.0を維持します。肥料は、スプレーポニック栽培のキュウリ処方を用います。

5 収量

R3年実績	定植	収穫	可販収量	合計
	2月19日	R3.3月21日~ 9月2日	25.9t/10a	35.6t/10a
	9月10日	R3.10月11日~R4.1月31日	9.7t/10a	

2作合計で、10aあたり約35tの可販収量が得られます。

6 経営試算

(千円/10a)

[想定経営規模]

経営形態 常時雇用 1名、臨時雇用10名
 経営規模 H鋼施設 50a キュウリ 年2作
 (国庫、県、市補助活用)
 出荷形態 主にJAへコンテナ出荷、一部直売

販売収入	11,390
売上原価	5,870
うち減価償却費等	1,750
販売・管理経費	2,300
雇用労賃	1,980
所得	1,240

(農試 園芸研究センター スマート園芸研究G)